

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

総合討論 (コメント)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 周, 星, 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006070

総合討論（コメント）

河合 それでは、総合討論に入ります。昨日から、有形無形の文化遺産につきまして、14名の方に報告していただきました。報告では、中国の文化遺産のなかでもとくに、生活に密着したものについて話していただきました。地域的には、台湾やチベットも含む中国全土を広範にお話しいただいたと思います。

ひき続きまして、ディスカッサントの先生からコメントをいただきたいと思います。周星先生にまずお話しいただいた後、飯田卓先生にお話しいただきます。

周星先生は愛知大学の教授で、人類学だけではなく考古学や民俗学の分野にも通じておられます。文化遺産、特に無形文化遺産については多くの論文を書かれていまして、この方面では非常にお詳しい方です。どうぞよろしく願いいたします。

周 昨日から今日までずっと、たくさんの方々からのご報告を聞いて、たいへん勉強になりました。こんなに充実した内容の研究に短い時間でコメントするのは難しく、自信がありませんが、自分なりのまとめをお話しさせていただきます。

人類学の視点が中国地域の文化遺産研究に対しておこなえる貢献について、いくつかのポイントがすでに皆さんのご発表で明らかになったかと思います。

1点目ですが、住民の目から見た文化遺産の記述は、人類学者の得意とするところです。住民とは、地元やローカルの人たち、市民、当事者のことです。中国の文化遺産に関わるさまざまな動きのなかでは、研究や学会も含めて、当事者がみられない。地元の人たちでない人たちが活躍する傾向が、中国の場合、よくあります。そうした状況に対して、人類学的なアプローチは、地域の住民や担い手の復権を唱えることができる。それが、われわれ人類学者の貢献のひとつだと思います。

費孝通先生は、次のようなお話をされたことがありました。人口の少ない少数民族において守るべきなのは、文化なのか人間なのか。そうした問題提起が、かつて中国でなされました。少数民族がそうした状況に置かれる時代には、文化遺産もよく似た状況にあります。人間は自分たちの生活の一部として文化を築きますが、その生活は流動的で変わりやすい。過去に築かれた文化と現在の生活とは、相容れないようにみえていたが、生活者として自ら自分たちの文化を試行錯誤し、選べるはず。われわれはどのような意味で文化を考えていくのか、はたして人間らしい文化はあるのか。

これらの問題に対してわれわれ人類学者は、当事者からみる文化遺産を原点とすることで、文化遺産の研究に貢献できると思います。たとえば、丹羽さんや姜娜さんの発表にみられたように、村レベルの生活に密着する文化遺産のあり方について、われわれ文化人類学者のアプローチは有効だったかと思います。

2番目に、人類学からアプローチする場合は、今回のフォーラムの出発点である文化遺産実践という概念が有効です。実践の反復による保護・継承という、従来の文化遺産研究とはやや違う発想から、文化遺産が論じられました。われわれが見ている文化は、固定されているのではなく実践されているということですね。そのことをふまえて、個別のケーススタディからさまざまなアイデアが生まれました。例えば川瀬さんの「演じ分け」、対内的パフォーマンスと対外的パフォーマンスなど。そういうアイデアをとおして、人類学の現場主義から、文化遺産を固定化していく傾向に対して異議を申し立てられたかと思います。

3点目は、文化と権力と行政と政治の関係性についてです。中国という巨大な社会システムのなかでは、文化そのものが政治であることが、われわれ人類学者にとって重要なポイントです。あるいは、文化を通して政治がおこなわれていること。人類学者の立場としては、政治や権力からやや距離を置きたいという思いがあるんです。ところが、中国の現場に行くと、どうしても避けられない。今回のフォーラムによる発見だったのは、フォークロアや民俗学、あるいは考古学や民間文学、民間文芸のような、文化遺産を積極的に保護しようとする学問と較べて、人類学は政治的な立ち位置がやや違うということです。われわれは権力との関係をやや警戒する傾向があるんですが、中国の民俗学（フォークロア）や考古学や民間文芸などの分野からみればむしろ、権力との関係性を警戒し軽くみている、無視する傾向さえもあるのです。権力との関係性があるので、やっけて行けるという発想ですね。人類学は「文化を書く」反省から、文化と権力との関係性を対象化している。これはまさに今回の国際フォーラムからみえてきた、人類学者たちのユニークな点です。さらにいえば、文化遺産の研究に対して、人類学たちのユニークな点です。

4点目ですが、文化遺産を継承する単位が地域なのか、民族集団なのかという問いかけがありました。私個人の印象だと、中国の人類学者や一部の日本の人類学者は、中国の少数民族を研究するときに、地域ごとの違いを無視して、あるいはいろんなサブグループの違いを無視して、つねに研究対象をひとつの民族としてまとめてしまうんです。今回の国際フォーラムでは、地域という視点から民族問題を把握する報告、あるいはその問題点を洗いだす報告が、兼重先生をはじめたくさんの方々から出されました。民族集団だけではなくて、地域から物事を考えることが重要だということです。民族集団にこだわりすぎる偏った研究の傾向性に対して、今回、新たな展開に気づかされたと思います。

もうひとつ、丹羽さんから翻訳の問題が提起されました。あるいは阿部さんの報告で、地元のハニ語では文化遺産という外来の概念が通じない、あるいは通じさせようとしてもなかなか難しかったというお話がありました。これもまた、まさに人類学的な問題提起だったかと思います。

いろいろな収穫はあったんですが、問題点もいくつかあります。ひとつは、地元の視点といっても、誰が地元を代表しているか。今回感じたのは、地元の重層構造です。地元の人たちとは原住民なのか、地域住民なのか、村人なのか、市民団体なのか、あるいは事務所なのか、定年で故郷に戻った元役人さんなのか。非常に複雑です。中国の場合、各地方の文人（郷土史家）たちもいます。

たとえば、阮先生の西湖についての研究ですが、西湖というのは有名な景勝地ですね。その価値は文人たちが何世紀も前から、南宋の頃からすでに記録しはじめていて、いわば各地方の伝統として何世紀もかけて構築されてきたものです。そういうものが、地域にとって価値ある有形無形の文化遺産となった。つまり、一言で地元あるいは住民と言っても、実際は簡単でなく複雑です。より地道な研究や分析も必要だと思います。

もうひとつは、政府とは誰かという問いに答えるのもそう簡単ではない。たとえば劉先生のご発表のなかで、馮驥才先生のお名前が出てきました。馮驥才は作家として、地元とは異なる立場で文化遺産化に貢献してきましたが、国家を代表するわけではない。また、北京の文化政治の図式の中では、中国民間文化協会などの民間団体が重要な役割をはたします。もちろん後ろには官（国家）があるんですが、文化面で重要なこの組織を国家といえるかどうか、じつに複雑です。

政府といっても、中央政府なのか地方政府なのか、あるいは行政機構なのか文化団体なのか、区別しなければ理解できないことがあります。中国の政治システムでは、中央政府の文化部が文化行政を担当しますが、その上でイデオロギーを司る中央宣伝部も関係します。ただ、改革開放以来は、イデオロギーと文化政治を分けて考えるのが大きな動きです。文化体制改革の中核の方向性ですね。文化部の下では文化庁、文化局、文化館、文化站というシステム、末端組織が働いています。

それぞれの思いでそれぞれが動いているけれども、現場に行くと丹羽さんのおっしゃったとおり、「馮さん」と呼ばれる翻訳者が、農民たちが分かるように行政の意図を解説しているわけです。そういう人たちを研究対象とするのが、われわれ人類学者は苦手でした。自己表現できるような村のキーマンたち、かなり自己主張できる文化人たちをわれわれが研究するようになると、われわれ自身も彼らの考えに同化されてしまう可能性があるのではないかと思います。

それから、問題点の3点目です。観光地化されたり遺産に登録されたりしたものについて、われわれの研究では、先ほど（*本フォーラムのコメントで）横山先生が指摘されたような消費者、文化遺産を消費している観光客たちのことをほとんど報告していません。こうした観点でなされた今までの研究を、これからは意識しながら、文化遺産の研究を進める余地があるかと思っています。

高倉さんから麗江についての報告では、住民と観光客とがともに構成した日常が麗江で新たに生まれてきたということが印象的でした。ところで、麗江に集まる人たちが求

めていることがらを考えると、先ほど河合さんがおっしゃった表象の問題に至ります。中国のインターネットの言いかたと、麗江は「ロマンチックな出会いの町」です。それは勝手な想像で、国ぐるみの空想、イメージづくりですが、地元の住民にとってはまったく違う。地元住民が文化遺産登録をとおして目ざした当初の目的や意義づけが、観光地化されながら徐々になら変わってくるのが、今後の非常に大きな問題のひとつになると考えるべきだと思います。庄先生に先ほど見せていただいた映画に登場する「虎日」の儀式的意味など、文化遺産と呼ばれるものの意味は、地元の人たちや政府、あるいは文化人のそれぞれにとってやや違う。そのことを、われわれ人類学者は大いに指摘していくべきかと思います。

それから、文化遺産というキーワードから、今まで人類学者によく見えていなかったところが見えてきました。文化遺産という概念やアプローチから、われわれ人類学者が反省させられた点も若干あると思います。

ひとつは、文化大革命がもたらした断裂性を、今まで強調しすぎたことを、今回、私自身も反省しました。確かに断裂は生じました。しかし歴史をさかのぼると、共産党の延安時代、毛沢東の延安文芸工作座談会よりすでに始まっていました。中華民国時代までもさかのぼれます。近現代の中国社会のエリートたちは、民間文化を改造しながら（改良なのか改悪なのか）利用してきました。文化大革命は行きすぎで、断裂を生じましたが、逆に言えば連続性もある。ときには劉先生のご発表のように、突然「伝承人」として認められるものもありますけれども、実際にはさかのぼってみると民間芸能も生き残り策を図っています。イデオロギーとかの邪魔が入っても、公的な登録などさまざまな口実でもって正当化を図っていくという、生命力ある民間文化のあり方がよくわかったかと思います。

今回の文化遺産のフォーラムで考古学分野のアプローチが見えてこなかったのは残念に思いますが、中国の場合、「文物」のカテゴリーを通じた文化政策の連続性もありました。それが着想されたのは1972年、文化大革命の真っ最中です。毛沢東が周恩来の提案を許可し、最初に復活させた学術誌は『文物』です、つまり文化遺産や文化財関係です。あれだけ過激だったイデオロギーの時代ですら、後に世界遺産になっている故宫など、文化遺産をめぐる保護する動きがあった。完全な断裂とはいえないと思います。

最後にもうひとつ反省させられたのは、人類学的な文化遺産研究の限界です。われわれ人類学者は、ミクロの現場からマクロな問題を語ろうとするのが癖で、個別のケーススタディから普遍的なものを語ろうとするわけですが、文化遺産に関しては、個別のコミュニティから解釈できない部分も多いかと思います。そうすると、文化遺産に関わる複雑な現場で一人の人類学者が確かめられる限界は、自覚しておかないと問題を生じるかと思います。

今度こそ最後ですが、先ほど、民間文芸研究や考古学、民俗学（フォークロア）が行

政権力との関係をあまり気にせず活躍していると指摘しました。それを逆に言えば、われわれ人類学者がイメージする文化とは異なったかたちで、それらの研究分野が文化を定義したり文化イメージを与えたりしているんです。その違いを意識しながら、文化に対するわれわれの思いや考えかた、発想を、再考したり反省したりすることが必要かと思えます。

とくに現代の文化に関しては、今回たくさんの話のなかで、「都市化」という言葉が一度も出ませんでした。時代がより複雑になるなかで、われわれは細かいところに注目しているけれども、木を見て森を失う危険性があることを、今回あらためて自覚させられたと思います。

私が自分なりに感じとったことは、以上で終わらせていただきます。よろしくお願ひします。

河合 周星先生、ありがとうございます。文化人類学者が文化遺産を研究するときに、どのような課題があるかということを詳しく問題提起していただきました。とくに地元の人とは誰か、政府とは何か（誰か）、それから観光客や消費者の目をどう見るか、といった課題をきれいにまとめていただいたかと思えます。

続きまして、飯田卓先生のコメントに移りたいと思います。

飯田 周先生の素晴らしいコメントの後で私がつけ足すと話をややこしくしてしまうと思いますが、いちおう言いたいことだけ申しあげて、あとはフロアにマイクをお渡ししたいと思います。

言いたいことは3つあります。まず第1点は、文化遺産という言葉がこれだけ普及してきた結果、どうも中国ではハイカルチャーとローカルチャーの対話が始まったらしいということです（スライド1）日本もおそらく同じ状況だと思うんですが、マダガスカルをはじめとするアフリカの一部はちょっと違う状況にあります。

High culture と Low culture の対話

- 精華／糟粕(劉)
 - Low culture: 生活そのものとしての文化(阿部、徐)
 - High culture: (主として支配層の)鑑賞や教養を目的とした記録
 - 文化人類学の文化／カルチュラル・スタディーズの文化
-
- 1920年代に始まった柳田國男の民俗学運動
 - 中国の場合は？ さまざまな対話段階が同時的に共存

スライド1

劉先生のスライドの言葉でいうと、私のいうハイカルチャーとは「精華」、ローカルチャーとは糟粕そうはくのことだと思います。中央から評価した地方の文化は「粕」ということですよね。とるに足りないものとこれまで考えられていた。中央からみて、地方の生活文化はとるに足りないものだったと思うんですが、文化遺産というかけ声のもとに、少しずつ再発見されることがある。そこが、21世紀の重要な状況だと私は思っております。生活そのものとして地方で伝えられてきた文化のなかには、中央にまで届かないものがあつたという点が大事なのではないかなと思っております。

たとえば、最後に庄先生がビデオでご説明くださったように、人の精神的な安定をとり戻すような能力が、集団的な儀礼実践には含まれています。この重要性は、強調してし過ぎることはありません。阿部さんは、ハニ族の景観がまさしく生活であるとおっしゃっていましたし、徐さんのご発表では、野草などとるに足りないようなものが一部の人たちにとってはひじょうに重要だということが再認識されてきた。文化遺産というかけ声のもとに、こうしたいろいろなことがらを考えていくことが重要なのではないのかと思いました。

そのうえで申しあげると、それだけで終わるわけではない。ローカルチャーを見いだしていく人たちは、主としてそれとは無関係だった人たち、多くは芸術作品や映画などのハイカルチャーを楽しむ層の人たちで、彼らが対話を開くきっかけになっていると思います。ハイカルチャーとローカルチャーというのをまったく別のものとしてとりあえず考えていますけれども、もちろん、両者を截然と分けられないケースもあります。ただし、まったくレベルの違う2つの文化を持った人たちが話しあう端緒が開かれている

ということが、ここで重要だと思います。

ローカルチャーというのは、戦後アメリカから日本に文化人類学が輸入されてから1970～80年代ぐらいまで論じていた「身についた文化」、個人の行動をとらえてしまうような強い規制をもった習慣に当たるかもしれません。それに引き換え、1980～90年代になると、イギリス由来のカルチュラルスタディーズという学問が文化人類学に影響してきます。このなかで分析の対象になるのは、たとえばテレビ番組や演劇など、ビジュアル化された、誰かに見てもらうための作品であることが多い。そういう文化が文化人類学の議論の上ってきて、いろいろな意味で文化が論じられるようになる。その結果、現在の文化人類学では、文化という言葉が非常に使いにくくなっています。こういう互いに異質な文化が、文化遺産の運動のなかで対話を続けてきているのだという気がします。

さらに言うと、私はまだ日本民俗学を勉強している最中ですが、1920年代に関東大震災が起きてから柳田國男が始めた民俗学の運動も、ある種、ハイカルチャーとローカルチャーを対話させるような運動だったと思います。中国についてはわからないんですけど、日本の場合は1920年代に、いわば学問のモダニティが始まります。柳田國男が巧みだったのは、大学に弟子を増やさずに、在野の民俗学者を組織してフォークロアを発掘していったことです。そのことによって、学問に在野の文化を認知させていくわけですが、その運動体をすべて中央にとり込んでしまわず学問化をあえて踏みとどまったところに、対話を持続させる仕掛けがあったと思います。ところが戦争と高度成長期を経しまうと、農村文化の中に蓄えられていた叡智といえるほどのものは、もう断片しか残っていないのではないかなという気がいたします。

これに較べてみると、中国の場合は、日本のように在野の叡智が断片化してしまった場所もある。たとえば都市部なんかはそうかもしれません。その一方で、周辺民族の居住地など周辺地域には、まだこれから汲みあげられるべき叡智を残している文化もある。そうしたところでは、宗教と芸術が組みあわさったようなかたちで根づいているというような印象を受けました。

日本は土地が狭いということもあるんでしょうけれども、文化の断片化が一気に終わっちゃった、しかし中国ではまだそこにまで至っていないと思います。その場合、徹底的に断片化させて終わってしまう可能性もありますが、なんらかの働きかけをして農村生活に文化を活かせるよう持っていけないか、そして、人類学がこの点で貢献していけないかというのが、私の考える希望です。

周先生は、農村や地方の文化をよく知る人（馮さん）がサポートしていくよう期待しておられるように感じましたが、私も同じことを感じております。日本では、農業改良普及員というのが終戦直後から現在に至るまで続いています（現在は普及指導員と呼ばれる）。これは主に技術者で、どういうふうに作物を栽培すればうまく育つか、たくさん穫れるかということを考える人たちです。地元のことをよく知ることが条件です

けれども、それと同時に、大学で農学も学んでいる。そういう人たちが中央の学問と農村との橋渡しをおこないます。彼らはしばしば「私たちは農家の人たちに教えてもらっている」とおっしゃいます。それと同じように、文化の農業改良普及員、文化普及員のような人たちがもっと育つ土壌ができていかないかということを考えています。

それから、フォーラムから受けた第2の印象。日本とは違うなと思ったのは、国を挙げて文化の振興を推し進めていることでした。日本は1950年代に文化財保護法を作りまして、それから徐々に地域の文化が権威づけられていきました。これに対して中国の場合、無形文化遺産がユネスコで制度化される2000年代初頭あたりを境として、国の文化振興政策が大規模に打たれていると思いました。いちばん僕の印象に残ったのは、文化遺産の問題が、文化大革命以来の大義としてとり上げられてきたことです。中国で文化遺産が振興される背景としては、大義の問題がひじょうに大きかったんだなと思いました。

皆さんのご発表からは、スライド2に示したような論点を拾いあげました。まず、登録をめぐる地域のあいだに不平等が生じてしまい、競合が生じるということ。河合さんが報告された事例では、文化遺産の認定を受けた隣接の地域を見て、別の地域が同じようにやろうと競合するんですけども、まったく別のタイプの建造物を遺産として指定しようとする、少し方向性の違う競合です。

国家による振興と、それに対する反応

- 文化大革命以来の大義
- 登録をめぐる不平等と競合(兼重、姜)(河合)
- 指定がうながす連帯(阮)
- 形式の変化(劉、川瀬)
- 断絶(川瀬)
- 担い手の入れ替わり(高倉)

スライド2

認定が担い手たちに連帯を促すという、希望の種になるようなお話もありましたし、やむを得ず遺産の形式が変わってしまうというお話もありました。10時間の儀礼が1時

間になってしまう例や、演じ分けという例もありました。演じ分けに言及された川瀬さんの事例では、2つ儀礼がありまして、子供たちが担うような儀礼が断絶してしまったというお話でした。文化遺産として認められたにもかかわらず、断絶してしまう例もある。これはよくないシナリオですけれども、致しかたない。

それから、担い手が入れ替わってしまうという事例が、高倉さんの発表された麗江においてみられました。文化遺産としては維持されているけれども見せかけだけで、内実は別の人が担っているという状況ですね。これがまさしく、周先生がおっしゃったような、文化を守るか人間を守るかという話に関わってくると思います。

こうした話を踏まえて、文化遺産登録の先を文化人類学者は考えなければいけないだろうと思っています（スライド3）。私の当面の戦略としては、いろいろなものを文化遺産と呼ぶことにしたい。国や自治体の指定を受けなくても、目を向けるべきものが身の回りにあるかもしれない。それをとにかく拾いあげるための運動として、これも文化遺産だあれも文化遺産だと話しあっていくような、ある種の文化的ムーブメントあるいは草の根ムーブメントを考えているんです。

ポスト文化遺産へ

- 石を投げれば文化遺産に当たる
- 担い手としての観客

- (とくに無形)形式の変化
- 今後の発展、革新？

- たえざる自覚化が可能か

スライド3

ただし、それには限界があるだろう。石を投げれば文化遺産に当たるような、世のなかで文化遺産であふれ返ってしまうような状況がありうる。そうしたなかで、文化遺産という言葉の力がなくなってしまったときのことを考えなければいけない。

写真3の2行目で、担い手としての観客という書きかたをしましたけれども、これは周先生が懸念されているのと同じように、商品化がどこまで進んでしまうか、観光化が

どこまで進んでしまうかということと関わってきます。ここでは観客を「文化遺産を維持する担い手」として位置づけているんですけども、彼らは儀礼の演じ手のような担い手と異なって、無責任なところで手を引いてしまいかねない。文化遺産のあり方を悪い方向に持って行ってしまう可能性があるので、つき合いかたのバランスを考えなければいけません。

それから、これはもはや強調するまでもないのかもしれませんが、とくに無形の文化遺産では、維持するというより形式を変えながらくり返していくという形でしか、保護しようがない。たしか清水さんが「今後の発展や革新というものを踏まえなければ、演劇の将来はあり得ない」というようなことをおっしゃっていました。まったくそのとおりで、なにもお金を取って維持する演劇だけに限らず、いろいろな地方に伝わる儀礼全般について言えることだと思います。

担い手がどういうかたちで遺産継承に関わっていくかとか、文化の形式をどういうふうに維持するかということも重要な問題ではありますが、私自身がいちばん気になるのは、人びとによる自覚の維持です。文化遺産という言葉が形作ってきたのは、人びとが身の回りのものをかけがえないものとして自覚化するプロセスです。これをいかに維持するか、絶えざる自覚化をいかに最後まで維持していくかというのが、いちばんの課題だというふうに思っております。

絶えざる自覚化はけっこう難しく、文化遺産に指定された直後は地域全体で盛りあがっているでしょうけれど、1～2世代後にはその盛りあがりहतぶん伝わらないだろう。そうなったとき、無形文化遺産や世界遺産に指定されたものの価値も伝わらないかもしれないということを、われわれは考えておく必要があると思うんです。それを踏まえたくて、ポスト文化遺産についてこれから考えていきたいと思っています。

以上は、今回発表してくださった皆さんからたくさん刺激を受けて考えたことです。パネリストの皆さんに心からお礼を申しあげたいと思います。どうもありがとうございました。